

名誉会員の推挙に寄せて



秋山 智久 新名誉会員

【本学会役員歴】

第14期 理事(3年)、第15期 理事(3年)、

第17期 理事(3年)、第18期 理事(3年)、

第20期 理事(3年)

理事通算5期(15年)



カナディアン・ロッキーにて

社会福祉従事者の 労働条件・資格・価値観・哲学

冬の朝、目を覚ますと枕元に雪が積もっていた。私が勤務していた社会福祉施設内の住込み職員住宅のことである。24時間、365日労働であった。この時以来、社会福祉従事者の労働条件に関心を持ち、その実態を調べるための全国調査を5年毎、6回、30年、行ってきた。送付した調査票は多い時で一回約1万であった。これを厚生省や専門研究誌に示し、労働条件の改善を訴えてきた。しかし、未だに良くなったという実感はない。

その原因は、社会福祉従事者は、専門性・専門職性が低くとも「優しさ」さえ有れば役に立つという社会の風潮に有った。彼らの社会的認知度は低い。そのことの実証的解明にも当たった。

やがて、社会福祉従事者の専門職性を高めて専門職制度を確立する必要があると考え、「社会福祉専門職」の研究に移った。向上のための一方法として、「資格化」が必要と思い、「社会福祉士及び介護福祉士法」の制定過程の運動に没頭した。日本社会福祉士会の創設に加わり、「設立宣言」、ロゴマークを作成し、初代副会長となった。『社会福祉士及び介護福祉士法制定過程資料集』(全3巻)も残すことができた。

ところが、社会福祉学科卒で実務35年以上のゼミ卒業生から、社会福祉の、専攻も、資格も、経験も有っても、「ダメな奴はダメ」という激しい指摘を受けた。すぐ辞めるか、挫折するか、意欲を失うというのである。

再び、社会福祉従事者の価値観の研究に立ち返った。本学会でも、倫理委員会委員長として「研究倫理指針」を作成した。行き着いたところは、恩師・嶋田啓一郎先生が既に研究の重要性を示して下さり、阿部志郎先生が実践の中で深めて下さった、「社会福祉哲学」であった。なぜ人は、こんなにも自らの利己心が強いにも関わらず、「人」(社会福祉利用者)を助けようとするのか。この不思議さに捉われた。逃げ出したくなる人(社会福祉従事者等)を支えるものは何なのか。価値観、使命感、愛、宗教？

重要なのは、「ソーシャルワーカーの最大の武器は、人間としての豊かさである」であった。勿論、必要なものは「社会福祉の知識と技術」であることは、調査から判明していた。

そして、やはり忘れてならないものは、前述した「室内の雪」であった。福祉労働の要諦は次の通りである。「疲れていては、良い仕事を、心から、続けてすることはできない。」